

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2018.7) 平成29年度:57.

体外式VAD装着患者の不安や抑うつ ～看護ケアに関する文献的考察～

酒井 周平

「体外式VAD装着患者の不安や抑うつ ～看護ケアに関する文献的考察～」

旭川医科大学病院 ICU ナースステーション 酒井周平

【目的】

近年、A病院ICUでは体外式補助人工心臓(以下、体外式VAD)装着患者が増加している。これらの患者は不安や抑うつ症状を認めることが多いため、看護ケアへの示唆を得ることを目的として文献的考察をした。

【患者紹介】

A氏、男性50代。急性心筋梗塞後のLOSのため体外式VAD装着し、30日間ICUに入院。A氏は寡黙な性格であったが次第に「生きるって辛いね」と話し、「自分でやってみようと思ってもできない」と生活行動ができず落ち込む様子や「機械の振動とか音とか、色々考えて眠れない」と不眠症状を認めた。B氏、女性20代。周産期心筋症のため体外式VAD装着し、20日間ICUに入院。「せつかつないでくれた命なのに、がんばれなくて迷惑ばかりかけて」と泣くことや、夫が帰宅すると「外に行かせて、もう死にたい」とパニック状態となること、「夜中、目が覚めた時に自分がどういう状態なのかわからなくて怖かった」と不眠が続いていた。

【結果】

このようなbridge to decisionとしての体外式

VAD装着患者に限定した国内文献は見当たらないため、植込型VAD装着患者を対象とした文献も含めて検討した。先行研究では、患者はVAD装着に伴う精神的な苦悩や家族・社会とのつながりの変化、心移植までの長期間、先が見えず厳しい精神的ストレス下にあるため抑うつ傾向にあることが示されていた。また、患者は不確かながらも現在から想起できる未来に志向し、現在を生きる意味を問いながら生きることや、成功体験により自信を積み重ねることで自分の強みに気づき、VADを装着したことに意味を持たせ、現状を肯定することで未来に残された自分の可能性を認識していることが明らかにされていた。

【考察】

体外式VAD装着患者は離脱が図れるのか、または心移植の待機となりうるのか定まっていないため、より不安や抑うつに陥りやすいことを看護師間で共通認識することが重要である。そして踏みとどまろうとする患者を支え、日常生活行動の中で自分の強みを感じ取ることができるような継続したケアの必要性が示唆された。